［特別講演Ⅰ］

軍医たちの無念

帚木　蓬生
作家／精神科医

2013年は，先の大戦での学徒出陣70周年でした．50あまりの大学と，200校を超える旧制専門学校・旧制高校・師範学校から，合計10万人の学生が戦場に駆り出されました．

この学徒出陣が医学生にも課せられた事実は，あまり知られていません．昭和20年3月，医学部3年生たちは，学業を1年短縮されて仮卒業となります．そして4月15日，医師免許証もないまま，陸軍軍医学校への入学を命じられたのです．入学は〈希望〉による〈採用〉の体裁をとって入ったものの，それ以外の道には歩めない仕組みでした．

もともと軍医学校は東京の戸山にありました．しかし3月10日の東京大空襲の余波で，神奈川県相模原に移転していた臨時東京第三病院（臨東三）に移設を余儀なくされていました．全国から集まった医学生1650余名の出身は，北海道・東北・東京・名古屋・京都・大阪・九州の七帝大とその附属医専，金沢医大・新潟医大・千葉医大・岡山医大・長崎医大・熊本医大の六官立大学とその附属医専，さらに慶応大学医学部・慈恵医大・日本医大，ついで医学専門学校の岩手医専・東京医専・昭和医専・大阪医専・日大医専・九州医専など，様々でした．

各自指定された装備，医学参考書，軍用図書，筆記具，軍刀または日本刀を詰め込んだ行李を担ぎ，相模原を目ざしました．奇しくも4月13日，山の手方面の東京大空襲があり，学生たちは焼野が原になった東京を眺めつつ，新宿から小田急電鉄で相模原に向かったのです．

この軍医候補生教育隊は大隊編成で，軍医中佐が統率し，秘匿名は誠部隊でした．四個中隊から成り，中隊長は軍医中佐です．各中隊は六個の区隊に分かれ，軍医中尉が区隊長でした．区隊長はすべて軍医候補生出身で，戸山の軍医学校を卒業後，数年間の戦地勤務のあと，軍医学校教官として帰任した選りすぐりの軍医でした．

ふた月にわたる訓練は，まさに分刻みでした．練兵場を走らされ，〈対抗ビンタ〉を受け，戦傷講義や救急法，三角巾の使用法，人工呼吸や止血法の実習が，コーリャン飯の空き腹で続きます．入校当日から連日の空襲でした．候補生たちは空襲警報で起こされ，燈火管制の闇の中を，兵舎の外にある地下防空壕まで走るのです．米軍機は東京や横浜方面を目標にしており，東京の市街地は炎に包まれます．そして6月15日の卒業式を迎え，配属先に向かいました．大方は郷里近くの陸軍病院が新任地でしたが，朝鮮半島行きを命じられた区隊員もいました．

西部軍配属になった約200名は，軍用列車に乗って，6月18日博多に着きます．翌19日，福岡空襲があり，空襲直後の西部軍司令部で第一次配属命令を受領しました．2カ月半後，各配属先で8月15日の敗戦を迎えます．除隊復員して出身校に帰学し，正式に卒業したのは9月半ばでした．

不幸だったのは，敗戦時に外地の医学部に在籍していた学生です．医大（満州・新京・佳木斯・哈爾濱）や医専（台北・京城・大邱・光州・平壌・咸興・樺太・旅順・青島）の医学生たちは進路を断たれました．

一方，敗戦以前に卒業した若い医師たちは，軍医補充制度によって，ほぼ例外なく軍医になっていました．兵の赴く所には，極寒の地であろうと酷暑の密林だろうと，戦艦であれ潜水艦であれ，軍医が同行しました．将校でありながら，軍医には戦争の大局は見えません．薬も器具もない，無い無い尽くしの与えられた戦場で，戦病傷将兵を治療し，亡骸を処理し，動けない兵は遺棄して転進し，あるいは自らも飢え，斃れていきました．その心痛と悲憤そして無念さは，いかばかりだったでしょうか．